

国際平和博物館について

平和を望むなら戦争に備えよ、というのは古い格言です。しかしもっと基本的に、平和を望むためには、戦争の何であるかを知らなければなりません。

なぜ、いかにして、平和が破れ、戦争が始まるのか。一度戦争が始まればどんなことがおこるのか。日本国民は十五年戦争を経験しました。しかし時が経つにつれて、その記憶はうすれ、資料は失われてゆきます。悲惨な記憶を語りつぎ、広汎な資料を保存し、次の世代へ備えゆくことは、きわめて大切でしょう。それは平和博物館の主な役割の一つです。

十五年戦争の当事国は、日本だけではありませんでした。相手のない戦争はないからです。また十五年戦争だけが戦争ではありません。その後も多くの戦争があり多くの人間が死んでいます。たとえ砲弾の飛び交うことがなくても、何十万の人々が餓死する状況が平和とはいえないでしょう。世界は平和ではありません。平和はまもるだけでなく、作りださなければならぬものです。平和博物館は、日本平和博物館ではなく国際平和博物館でなければならぬでしょう。

戦争と平和は、経験すればわかる、経験しなければわからない、というほど簡単な現象ではありません。それが何であるかを理解するためには、視点を変えて、さまざまな角度から同じ現象を眺め、みずから考える必要があるでしょう。司令部にとっての西部戦線には異常がなく一人の若い兵士にとっての西部戦線が生涯の終りの場所でした。大臣や将軍の戦争と兵士の戦争とはちがいます。戦争とその準備でもうける側からみた戦争と、損をする側からみた戦争もちがうでしょう。戦争の犠牲者である一国民は、同時に相手側に対する加害者でもあります。いかなる政府も、国民の積極的な支持なしに、大がかりな戦争を行うことはできないのです。国際平和博物館のもう一つの大きな役割は戦争と平和について考える場所を提供し、さらには平和をつくり出すための研究を進める施設になることです。

大学は教育と学問的研究の機関ですから、それが大学のなかに作られたことの意味は小さくないでしょう。その意味は、博物館とその活動が市民の誰にも開放されることで、さらに大きくなるはずで

1992年5月 立命館大学国際平和ミュージアム館長 加藤周一

愛国心について

今年二〇〇六年は、詩人ハインリッヒ・ハイネ（一七九七—一八五六年）の没後一五〇周年に当たる。友人のドイツ人からの手紙にハイネの詩句が引いてあった。「昔ほくには美しい祖国があった」(Ich hatte einst ein schönes Vaterland)という一行で始まる詩。その動詞が過去形で、しかも「昔」(また「かつて」)で強調されているのは、昔はあったが、今日ないという意味を際立たせる。ハイネは若くして(三四歳)フランスに亡命し、そこでこの詩を書いた。青春の思い出の地＝故郷＝祖国ドイツは、今やはるかに遠い。遠いからこそ苦難の多かった過去が美しくなったとしても不思議ではないだろう。

私はその詩をくり返し読んだ。愛国心とは自分の国に愛着を覚えることだと辞書にも書いてある。しかしそれはあまりに漠然としていて、自分の国のどこに、何ごとに、愛着するのか、全く明らかでない。その国のすべてにか？ そんなことはあり得ないだろう。どこの国にも、美しい山野があり、ゴミ捨て場がある。善意の人々が住み、どろぼうも住む。「美しい祖国」の何を詩人は愛したのか。彼は「高く伸びた榿の樹」や「優しくなすむいたすみれの花」を愛した。そして「それは夢のようだった」という(Es war ein Traum)。その後に来るのが「ドイツ語」。祖国は口づけをしてドイツ

語で言った(それがどれほどよく響いたか信じられない)「お前を愛している」と。榿の樹とすみれの花とドイツ語の響き、——これがハイネの祖国の内容であった。

私は「愛国心」について考える。国の場合にかぎらず、その対象が何であっても——神でも、人でも、榿の樹でも菩提樹でも、すみれでも野ばらでも、「愛」は外から強制されないものであり、計画され、訓練され、教育されるものでさえもない。ソロモンの「雅歌」にも「愛のおのずから起こる時まで殊更に喚び起こし且つ醒ますなかれ」という(第二章七、第八章四)。「愛」は心の中に「おのずから起こる」私的な情念であり、公権力が介入すべき領域には属さない。

愛国心も例外ではない。それを国家が「殊更」に「喚起」しようとするのは、権力の濫用であり、個人の内心の自由の侵害であり、「愛」の概念の便宜主義的で軽薄な理解にすぎないだろう。偶然生まれた国は愛するに足らず、という意味のことを言ったときに、内村鑑三はたしかな愛の対象として国の上に神をおいていた。愛を二つの主体間の関係として定義したマルティン・ブーバーは、その究極の実現が神と人との間にのみ期待できると考えていた(And Thou, 1923)。人間にとつての愛の意味はそういう深さにまで及び得るのである。

祖国とその言葉へのハイネの強い愛着は、その国の歴史や社会への彼の激しい批判を排除するものではなかった。言論表現の自由に関して、一九世紀前半のドイツとフランスの間には大きな格差があり、それが彼を七月革命の翌年、フランスへ追いつた理由になった。ライン川の北では彼の著書が発禁になり、後には著書が入国禁止になったことさえある。ライン川の南ではパリの知識人たちが中道左派の詩人＝コラムニストを歓迎していた。彼はドイツの新聞へフランスの状況を報告する記事を

送り、フランスの公衆へ向かつてはフランス語でドイツ史を説明し、警告していた。私は昔ハイネの名著、『ドイツ宗教・哲学史考』（一八三四年）を読んだことがある。今はその内容の大部分を忘れてしまったが、叙述の激烈な口調だけはよく覚えている。その時以来、私にとってのハイネは、もはや単なる『歌の本』の抒情詩人ではなく、同時に戦闘的、挑発的で、しばしば痛烈な皮肉を放つ思想史家になった。ハイネのこのような二面はどう折り合うのだろうか。

前半生をドイツで暮らしたハインリッヒ・ハイネと、後半生をフランスに生きたアンリ・エーヌ（とフランスでは発音する）、祖国での迫害と亡命先での自由、優しい抒情と鋭い批判、ドイツ語の響きへの感受性とドイツ思想を鋭く鋭い知性、——そういうことについては、対照的な二項対立のようにみえるが、実は一点に収斂するものなかもしれない。

祖国への愛は情念である。自己批判は理性の働きである。理性的に統御されない情念は、しばしば自己陶醉を推し進めて、どこまで行くかわからない。愛国心は容易に排他的ナショナリズムになるだろう。その結果がどうなり得るかは、われわれのよく知るとおりである。ハイネは狂信的なナショナリズムへ向かったことがない。かれの知性は抒情詩の中へまで浸透し、常に鋭い皮肉となって生きていた。他方その祖国愛、または亡命地でこそ却って強められた愛国心が、彼の筆鋒を鈍化させたこともない。

批判は常に厳しく、しかし、自国を憎んだことはなかった。自国の過去と現状を批判するためには、相当の犠牲が必要である。故にこの国のいつの時代にも御用詩人、御用学者がいる。ハイネがあえ

てその道を行かず、信念を貫いたのは、彼が愛国者であったにもかかわらずではなく、愛国者であった故にである。

批判の内容には誤りがあったかもしれない。しかしそれは愛国心の有無とは全く関係がない。もし愛国心がなければ誰もその国の未来を心配しないだろうし、その国の未来に関心がなければ、個人的な損失をしのいでも——ハイネは亡命を強いられた——、わざわざ国の現状と過去を検討して直言をしないだろう。ハイネの祖国愛と祖国批判との間には、もちろん、緊張があったにちがいない。しかし、矛盾はなかった。両者は同じ源から発し、同じ目標へ向かう。理性は情念を統御し、情念は理性の働きを支える。もし路傍の花を愛すれば、その花を踏みにする暴力に抵抗するのは——できるだけの話だが——当然であろう。

私はハイネの詩をくり返し読んで、ほとんど暗誦するまでになった。それは夢だったかもしれない。しかし何という美しい夢だったか。私は詩を書き送ってくれた友人に感謝する。

「夕陽を愛する」 二〇〇六年三月二日